

『一切悪趣清浄儀軌光明莊嚴』にみる引用経軌について

中島小乃美

はじめに

『一切悪趣清浄儀軌』(D.No.483 ta, P.No.116 ta)は、瑜伽タントラとして知られ、根本タントラである『初会金剛頂経』の釈タントラにあたとされられている。これに対する註釈は大部なもので五本ある。その中でも『大日経』、『初会金剛頂経』の註釈者として知られるブツダグヒヤ (Budhagahya) と、『初会金剛頂経』、『理趣広経』を註釈しているアーナンダガルバ (Anandagarbha) の註釈があり、瑜伽タントラの理解に大きな役割を果たしている。しかし、今回取り挙げる『一切悪趣清浄儀軌光明莊嚴』(D.No.2627 chu, P.No.3454 khu) は、デルゲ版、北京版ともに著者不明であり、五本のうちで一番短い註釈である。ツォンカバ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa i dpal, 1357-1419) が残したこの経軌に対する『割註』では、各註釈の真偽について記されているがこの註釈に関する記述はなく、あまり注目されてこなかった註釈であることが窺われる。このような中で何故、今この註釈を取り挙げるかという点、この註釈は、通序段から別序段の冒頭までの中で何本かの引用経典を用いて論を展開しており、引用箇所を一つ一つ当たったところ、日本においてもなじみ深い『大日経』、『金剛頂経』、『理趣広経』、さらに『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』を引用し論を展開していることと、更に他の註釈者が引用していなかった『吉祥金剛心莊嚴タントラ』も引用されていることが

わかった。これらの引用箇所を詳しく検討していくことで、この註釈者の本経軌の理解の一端を明らかにし、本経軌そのものの理解の一助としたい。

なお引用の詳細は末尾の表を参照されたい。

一、『大日経』の引用について

『大日経』は日本でも大悲胎藏生曼陀ラを説く經典として知られている。

この註釈では、本経軌の冒頭部分で世尊の教令を受けようと集会する者たちに対して解釈する中、「菩薩摩訶薩」について『大日経』を引用している。『大日経』の引用はこの「説如来品」の一箇所のみであるが、菩薩の定義にかかわる重要な部分である。「菩提は虚空の相にして、一切の分別を離れている。彼の菩提を樂求する者が菩薩といわれる」(以下、引用箇所は表を参照)とあり、菩薩とはどのような者であるかを明確に示した偈頌である。この部分は、本経軌の註釈者の一人であるカーマデーヌ(Kamadenu)が同様の箇所と、仏(正等覺者)の定義の部分を引用している⁽¹⁾。また、ブツダグヒヤの『初会金剛頂経』の註釈に対して註釈を記したパドマヴァジュラ(Padmavajra)も金剛薩埵性を明らかにしていく過程の菩提薩埵の解釈のなかで引用している。このことから「説如来品」は如来、菩薩を解釈する上で重要な定義を説く章として註釈者達に理解されていたことが知られる。

二、『初会金剛頂経』の引用について

『初会金剛頂経』は『大日経』と並び、金剛界曼陀ラを説く經典として日本でもなじみ深い密教經典の一つである。この経軌の根本タントラにあたり、この註釈では四箇所引用している。

本経軌の経題「一切悪趣威光王儀軌」の「威光、儀軌」と、聞成就と時成就の部分の「我れ聞けり」、「或る時に」、

「一切仏、菩薩が加持されたとき」についての解釈の中と、眷属成就の中「龍などの多くの眷属が」、更に「不退転の菩薩である僧伽の無量の者たち」について『初会金剛頂経』を引用している。

「儀軌（経軌）」についての引用箇所は、『初会金剛頂経』のエッセンスをまとめた「教理品」からである。この偈は多くのインドの仏教学者だけではなくツォンカパも引用する重要偈であり、密教を象徴する偈といっても過言ではない。すなわち「諸仏の智慧は常に無分別より生ずる。無分別智より〔生じたから〕それ故分別と言われる。その無分別において分別せられるそのものは、分別より生じたものである。金剛薩埵大士尊はそれ故に分別と言われる」と説かれ、無分別智の中から生じたものは空性そのものであり、密教の実践者である金剛薩埵もまた空の実践者であることに他ならず、それ故に密教におけるマンダラ、真言、念誦、護摩も仏教の実践行なのである。この偈によって、儀軌とは単なるヒンドゥーを模した儀式ではなく、仏教の実践行としての理解が示されたということができ、そのため瑜伽タントラの各註釈者がこの儀軌 (kalpa, rōg pa) の解釈に必ずこの偈を引用していると考えられる。

またこの引用箇所は殆どが第一章「金剛界品」からの引用である。具体的には「或る時に」の解釈で釈尊が金剛座で成道なされたまさにその時が説かれる五相成身観の部分、「一切仏、菩薩が加持されたとき」も五相成身観によって釈迦牟尼如来になられ、四方をご覧になられ説法（加持）されるためにお坐りになられた所を引用している。また経題の「威光」、及び経軌の「我れ聞けり」、「一切仏、菩薩が加持されたとき」の解釈については、阿弥陀如来を取り囲む法・利・因（輪）・語の菩薩から法と因（輪）菩薩が、更に宝生如来を囲む宝・光・幢・笑の菩薩から光と幢菩薩が出生する所を引用している。しかし、「龍などの多くの眷属が」の引用箇所については、びつたりした所が見当たらず、取意偈かと思われる。

ところで、この註釈者は冒頭の部分で真实性について述べている。彼は真实性を (一) 真言、(二) 印、(三) 三摩地 (samādhi, ting nge 'dzin)、(四) 念誦、(五) 護摩の真实性として解釈しており、このように真实性をいくつかに分けて解

釈する方法は、アーナンダガルバが『初会金剛頂経』と本経軌の註釈の中で十の真实性として、またパドマヴァジュラは『初会金剛頂経』の註釈の中で三十七の真实性として科文分けを行っており、彼等の影響を受けたものと理解することができる。

三、『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』の引用について

『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』（以下 $\langle \text{S} \rangle$ と略記）は日本ではあまり馴染みのない經典であるが、『初会金剛頂経』の釈タントラとして捉えられており、ツォンカパも重用視した經典である。經典全体は偈頌形式で説かれ、チベット訳のみが現存しており難解な經典である。しかし瑜伽タントラを解釈していく上で重要な語句の定義を行っており、看過できない經典である。筆者は十数年前より、タントラ仏教研究会のメンバーと共同で翻訳作業を進めてきた。今回の引用箇所指摘もその成果といえることができる。⁽³⁾ この註釈では細かく分けると八箇所ほど引用している。

先ずこの註釈の全体の科文分けには、この経で示された三三三摩地（第一瑜伽三摩地、マンダラ最勝三摩地、羯磨最勝三摩地）の方法で全てのマンダラの解釈を行っている。

次に、経題の「威光王」の「王」についての解釈の中で「王とは全てより殊勝に成じ、輝き、光明となれる者であるから王であり、大執金剛のことである」と自身⁽⁴⁾の解釈を示した後に、更に執金剛について詳説するために $\langle \text{S} \rangle$ を二箇所引用している。即ち、執金剛は単なる独剛杵を執る菓叉の主ではなく、〈勝者執金剛〉であり、〈全てに最勝なる有の自在者〉であり、〈秘密「真言行」に通達した者〉である。このような者が王であると解釈している。特に最初の引用は、 $\langle \text{S} \rangle$ の冒頭にあたる部分であり、帰敬偈の次の第一偈に相当する部分、説者が登場して来たまさにその場面を引用している。二箇所目の引用は、〈通達者〉についての解釈であるが、この引用箇所の理解のためには、直前の偈から見ていく必要がある。

一切諸法は無であり、相無く無顕現である。相無く虚空に等しく、所縁を厭離し、自性無く、無言説であり、一切諸法は言葉の行境に非ず。しかしながら、「それらの」秘密観察をもってここでは通達した者と言われる。

無分別〔の分別として〕の諸法の法のその義は何であるといわれるのか。我は無く、有なる法でもなく、諸法は無く、無分別である。しかしながら、法性を悟り、法〔身〕と受用〔身〕を悟る。分別は了義と言われ、ここにおいて希有なるものが分別〔と言われる〕。一切法は色形有るものではなく、また色形有るものともここで説示される。一切法は言葉の範囲を超えており、「無分別の分別としての」声であることもここで説示される。それ故にこの希有なる法としての分別こそが分別（経軌）であるとされる。何故これは希有なる法であるのか。

秘密真言の成就のために六〔波羅蜜〕なる諸業（はたらき）と、色形有る言葉の威力などと、「それらは希有なる法の」果の故に希有なる律儀であり、それ故にこれは希有なる法であり、それ故にこれは分別と言われる。それ故にこの希有なる法としての分別のみが〔ここでの〕分別である。

またここでの分別はどのようなものであるのか。

すべての有情利益のために、「慈悲の」菩提心を発して、六波羅蜜行に依止することがまさに分別である。⁽⁵⁾（傍線部は引用箇所）

とあり、このようにあえてこの偈を引用するまでもなく、通達者の根拠であれば他にも適切なところがあったと思われる。しかしこの無分別の分別として云々は、先述したように密教を特徴付ける重要偈であり、V.S.でも採り上げられ、『初会金剛頂経』をさらに一歩進めた形で詳説されている。このことを十分にふまえた上での引用であると考えられる。またここでは何が希有なる法であり、何のために何を分別するのかということについての明確な答えを示している。

註釈は続いて経題の「儀軌」の解釈に移り、ここでは先述した『初会金剛頂経』の偈を引用している。そして更に多くの眷属達が世尊の周りに集い、安住されたところまで文々句々の解釈を示した後で、「斯様に吾れ聞けり」の「斯様に」の解釈のために再び ΔS を引用する。この引用箇所も僅かな部分であり、あえて ΔS を引用するまでも無いようなところである、しかしこの引用箇所を見ると、 ΔS が無分別の分別を詳説する所である。このように経題の解釈と、王・勝者執金剛、斯様に吾れ聞けり、までの引用に『初会金剛頂経』の重要偈を用い、更に ΔS までも用いて論を進めているということは、この偈が瑜伽タントラによって重要な概念であると同時に、この経軌そのものの性格を良く表していると思われる。即ち、『初会金剛頂経』が根本タントラであるのに対して、 ΔS と本経軌は釈タントラという位置づけにある。 ΔS が密教の概念の定義化の役割を担うとすれば、本経軌はその実践の一面である衆生済度の役割を担っている。そのため多くの天の神々を配した十二ものマンダラを説き、その一つ一つに救済の役割を担わせている。そしてそれらのマンダラ、印、真言、護摩はすべて悲あるが故に無分別の分別として顕現したものである。それはまた本経軌においても「一切仏の無上なる菩提心に通達される王(仏)が仰せの「無分別」智なるその「分別の名義」がマンダラ (mandala) で真髄と言われる」と説かれていることから窺い知ることができる。更にこの註釈者は、解釈の点からも「威光王儀軌」の「王」と「儀軌」、そして「斯様に吾れ聞けり」の「このように」という部分に無分別の分別云々の偈を用い、これらのマンダラ、印、真言、護摩がヒンドゥーのものとは一線を画し、仏教として示されたことを象徴する引用であると考えられる。引用部分は僅かであるが、充分この經典の前後の偈を熟知した引用であることができる。

続いて「世尊」の解釈に、bhagaとvatとして字義釈した所を引用している。

また「種々の天や天女が遊戯され、享樂せられる」について、「種々の天や天女」は、先ず「天」を「菩提心を生起する布施波羅蜜」の実践者とし、金剛薩埵が菩提心の賢なる者であることを根拠として解釈を示している。したが

つてここでの天、天女は金剛界の菩薩として解釈しており、天は金剛薩埵が、天女は「嬉菩薩・鬘菩薩・歌菩薩・舞菩薩」が想定されている。それは次の「遊戯」の引用のところで明らかとなり、△には「嬉・鬘・歌・舞」菩薩がそれぞれ布施・戒・忍辱・精進波羅蜜の実践者として金剛女尊として解釈されていることを根拠として述べていることからも、天や天女が単なる神ではなく、仏教の護持者であり実践者であることを暗に示しているものと考えられる。そして「享楽」も単なる天の楽しみに耽るのではなく、如来遊戯の楽しみに享楽せられるのであり、それはこの註釈者が示すように「希有なる法の解脱そのもの」ということができる。この部分はまた漢訳の『一切秘密最上妙義經』にも見られる偈と一致する（表参照）。

ところで、この△は二つの大きな章から成り立っており、二つ目の章に「第一」という記載が有る事から、桜井氏によって「成立基盤を異にした二つの部分から成立している」という指摘がなされているが、△の引用は、氏の指摘する一つ目の大きな章が終わったあと、次の章が始まった直後である。そのためこの△からの引用は、氏の指摘する二つの部分から引用されていることになり、少なくともこの註釈者は一つのまとまったものとして扱っているということとは指摘できる。

次いで「蓮華座に安住されて」については、この經典の冒頭の部分からの引用である。

四、『一切悪趣清淨儀軌』の引用について

本経軌からの引用である。ほぼ一致する所は一箇所のみであった。他に「この経自身の中に」とある所が十一箇所ほどみられるが、本経軌には見当たらない。ここは多くの眷属達が集会される場所の風景の描写の部分であり、経軌自体もサンسكريットの音写が多く、全てが判読できていない。他の經典と混同しているかとも考えられるが、他の引用が比較的正確であったため、腑に落ちないものがある。今後の課題である。

五、『理趣広経』

日本の真言宗で常用經典とされる馴染み深い經典である。ここからは一箇所ではあるが、この經典を象徴する赤蓮華の譬えの偈が引用されている。この赤蓮華の譬えは『理趣広経』の中で六回に亘り引用されており、北村氏は「本経の最も意図する所」と指摘されている。⁽⁸⁾白ではなく、赤蓮華として衆生済度に愛着し貪染する菩薩の在り方を強調する偈であり、本経軌が方便としての役割をもつことと、後半のマンダラがより無上瑜伽タントラ的になってゆくこととも関係しているものと考えられる。

六、『吉祥金剛心髓莊嚴タントラ』

この経は西藏大藏経、大正新脩大藏経とも『理趣広経』のすぐ後に分類されている經典であり、無上瑜伽タントラタントラの註釈では馴染み深い。

この註釈者は、*“mau”* (慧者) の解釈にこの經典を引用しており、本経軌に説かれる慧者をそれぞれ金剛界の十六大菩薩として解釈し、その根拠にこの經典を引用している。他の註釈者であるブツダグヒヤは『大日経』寄り、アーナンダガルバは『初会金剛頂経』寄りの解釈を示し、カーマデーヌは、両者とは異なり『大乘莊嚴経論』などを引用して解釈していた。この註釈者は慧者を金剛界の十六大菩薩に配して解釈し、その根拠にすべて『吉祥金剛心髓莊嚴タントラ』を引用しその根拠としている。この經典の中で十六大菩薩は、大乘の実徳目を積んだ者として解釈されており、先のVSでの「天女」の引用箇所での解釈と同様の解釈の特徴が見られる。

当然VSでも十六大菩薩について詳説しているが、先の『理趣広経』の引用と同じく、特に本経軌の *uttaratantra* が無上瑜伽タントラ的なマンダラを説くことを考えると、意図的にこの經典を引用されていることが窺

われる。

おわりに

この註釈の中の引用経典を概観したが、行タントラの中から『大日経』を、瑜伽タントラからは『初会金剛頂経』、『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』を主に引用している。また無上瑜伽タントラへ繋がる経典として『理趣広経』と『吉祥心莊嚴タントラ』を引用しており、短いながらも非常にコンパクトで的確な引用を行っている。また、その引用箇所は各経典の重要命題に関わるところであり、ポイントを捉えた引用であると同時に、本経軌の行タントラから無上瑜伽タントラの内容までを含んでいるという特徴を彷彿させるような引用方法に、非常に示唆されるところが多く、デルゲ版、北京版ともに著者不明でありながら、チベット大蔵経の中に納められたということに合点がいく。

註釈書を廻っては単にインド撰述か否かや、註釈者の真偽に関わらず、経典そのものをどう深く理解しているかが問われるべきであり、この註釈の引用経典を考察してゆく過程でこのことを痛感した。

【略号】

『一切悪趣清浄威光王儀軌光明莊嚴』

Sarvadurgatiparisodhanatejorāyukalpālakāṅkaranāma

Nang song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjid kyi rgyal po brtag pa snang ba'i rgyan zhes bya ba//

(D.No.2627.chu, P.No.3454. khu)

『一切悪趣清浄儀軌』

Sarvadurgatiparisodhanatejorāyukatāgatahate samyaksambuddhasyākalpanāma

De bzhiṅ gshogs pa dgra bcom pa yang dag par rtsogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjid kyi rgyal po'i

brtag pa// (D.No.483.ta, P.No.116.ta)

『吉祥金剛心髓莊嚴タントラ』

Śrīcvijamanādalāṅkāra-nāma-mahātāntarāya

dPal rdo rje snying po rgyan zhes bya ba i rgyud kyi rgyal po chen po// (D.No.490.ta, P.No.123.ta)

『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』(VŠ)

Vajrasākhara-mahāgyuhyaogatantra

gSong ba nyal byor chen po i rgyud rdo rje rnyse mo// (D.No.480. nya, P.No.113. nya)

『初会金剛頂経』(仏説一切如来真实撰大乘现證三昧大教王経)

Sarvathāgatātattvasaṅgraha-nāma-mahāyānasūtra

De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyia bsdu pa zhes bya ba theg pa chen po mdo// (D.No.479. nya, P.No.112. nya, T.No.882, 885)

『大日経』(大毘盧遮那現等覺神變加持経)

Mahāvairocanaśhisambodhivikurvitāhīṣhānavaiṣṭvāsūtreindrārāja-nāma-dharmaparyāya

rNam par snang mtzad chen po mngon par rdzogs par byang chub pa nam par sprul pa byin gyis rlob pa shin ta rgyus pa mdo sde'i

dhang po i rgyal po zhes bya ba'i chos kyi nam grang// (D.No.494. tha, P.No.126. tha, T.No.848)

堀内⁸⁶

堀内寛仁『梵藏漢対照・初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』上・下、密教文化研究所、1983、1974年。

『理趣広経』

Śrīparmadāyamaṅtrakalpakāṇḍa-nāma

dPal mchog dang po i sngags kyi rtog pa'i dam bu zhes bya ba// (D.No.488.ta, P.No.113 T.No.244)

和訳 1、2、7

タントラ仏教研究会『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』和訳(1)『密教学』35、一九九九年。
タントラ仏教研究会『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』和訳(2)『密教学』36、二〇〇〇年。

タントラ仏教研究会「金剛頂大秘密瑜伽タントラ」和訳(7)『密教学』41、二〇〇五年。

註

- (1) 拙論『一切悪趣清浄儀軌』の研究—Kamadhenuの註釈書にみる引用経軌について—『密教学研究』35、二〇〇三年。
- (2) 北村大道『Tnārthāvatāra』を中心とした『金剛頂経』の研究(再一)『密教学』37、二〇〇〇年、一五ページに詳しく。
5。
- (3) この経軌のアーナンタガルバの註釈の中では、この『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』が特に多く引用されている。その詳細は拙論『Anadagṛbha 著『一切悪趣清浄儀軌』にみる *Vajrasakharavāntra* の引用について』『密教学』43、二〇〇六年を参照されたこと。
- (4) rgyal po ni kun las khyad par du gyur pa mdzes shing 'bar bar guyr bas rgyal po ste / rdo rje 'dzin pa chen po'o // (D.226b, P.248a)
- (5) chos kun dngos po med pa ste // mshan ma med cing gsal byed med // mshan nyid med cing mkhar' dang mshungs /
/dmigs pa nam par spangs pa ste // rang bzhin med cing brjod du med // chos kun tshig gi spyod yul min // gzhan yang
gsang bar brtags pa ste // de phyr 'dir ni rtogs par brjod // rtog pa med pa i chos nams kyi // chos kyi don 'di ci yin brjod /
/bdag med dngos po yod pa min // chos nams med cing rtog pa med // 'on kyang chos nyid yang dag rtogs // chos dang
longs spyod rdzogs par rtogs // rtogs pa nyams su myong bar brjod // 'dir ni ngo mshar nyid du rtogs // chos kun gzugs can
min pa dang // gzugs can du yang 'di ru bstan // chos kun tshig gi spyod yul min // sgra ru yang ni 'dir bstan te // de bas ngo
mshar chos 'di ru // rtog pa rtog pa yin par brjod // ci phyr 'di ni ngo mshar chos // de nyid gsang ba bsgrub pa i phyr /
/las nams drug po nyid dang ni // gzugs can tshig gi mthu dag dang // 'bras phyr sdom pa i ngo mshar te // de phyr 'di ni
ngo mshar chos // de phyr 'di ni rtog par brjod // de bas ngo mshar chos 'dir ru // rtog pa rtog pa yin par brjod // ci phyr
'di ni ngo mshar chos // de nyid gsang ba bsgrub pa i phyr // las nams drug po nyid dang ni // gzugs can tshig gi mthu dag
dang // 'bras phyr sdom pa i ngo mshar te // de phyr 'di ni ngo mshar chos // de phyr 'di ni rtog par brjod // de bas ngo
mshar chos 'di ru // rtog pa 'bar zhig rtog pa yin // sems can kun gyi don bya i phyr // byang chub tu ni sems bskyed nas /

- /pha rol phyin drug spyod pa dag // /sten pa rtog pa nyid yin no // (D.148a-b, P.168b-169a)
- (6) sangs rgyas kun gyi byang chub sems // bla na med pa rtogs gyur pa // rgyal pas gsungs pa'i ye shes gang // de ni dkyil
 'khor snying po gsungs// (D.62a, P.56a)
- (7) 桜井宗信「Vajrasāccharatantra の一考察」『智山学報』35、一九八六年。
- (8) 北村太道「理趣広経」における秘密成就法について」『密教学研究』34、二〇〇一年、七頁。
- (9) 拙論「Buddhaguhya の『一切悪趣清浄儀軌観』(1)」『密教学』38、二〇〇二年。「Ānandagr̥ha の『一切悪趣清浄儀軌観』」『密教学』39、二〇〇三年。

<p>17 無量慧とは、一切三界の二資糧と地と波羅蜜を完成することであり、 (それは)金剛宝である。それはまた斯様に『吉祥金剛心隨莊嚴タントラ』 の中に「三界の大(宝)王であり、[福德・智慧の]二資量を 円満せる者であり、[十]地と波羅蜜の最勝者であり、金剛灌頂をよ く出生する者である」と仰せられているからである。</p>	<p>無量慧と は、金剛宝</p>	<p>『吉祥金剛心隨莊嚴タントラ』 無量智は一切の三摩地を成ずる者なり。地と波羅蜜を成ずる者なり。金剛灌頂を よく出生する者なり。金剛の王にして、十地と波羅蜜の最勝者なり。金剛の 灌頂をよよく受くる者なり。 (D.230a, P.252a)</p>
<p>18 不動慧とは、菩提心を生起し、堅固であり、空性より出生した不動 [慧]は金剛手である。斯様に「趣に舒適する心[をもち、仏]教の 真髄中に修習しつつ、空性そのものより出生したもので、それを金剛薩 埵と説かれる」と仰せられているからである。</p>	<p>不動慧と は、金剛手</p>	<p>『吉祥金剛心隨莊嚴タントラ』 不動の智慧は菩提心を生起し、堅固にして、空性より出生した不動の 智慧は金剛手である。斯様に「趣に舒適する心[をもち、仏]教の真髄 中に修習しつつ、空性そのものより出生したもので、それを金剛薩埵 と説かれる」と仰せられているからである。 (D.230a, P.252a-b)</p>
<p>19 広大慧とは、無我にして無二智の法性であり、不可思議なる広大金剛 法であつて、斯様に「無我の法から出生した者であり、最勝無二智者 であり、不可思議なる最勝法性か金剛法」と仰せられてい るからである。</p>	<p>広大慧と は、金剛法</p>	<p>『吉祥金剛心隨莊嚴タントラ』 広大なる智慧は、無我にして、無二の法性であり、不可思議なる広大なる 金剛法である。斯様に「無我の法から出生した者であり、最勝無二の 智者であり、不可思議なる最勝法性か金剛法」と仰せられているから である。 (D.230a, P.252b)</p>

